

我が国における神像の源流とその周辺

——とくに八幡神像を中心として——

The origin of the image of god in Japan

——Especially in the case of Shintoism——

中野 幡 能

神像の源流

崇敬・信仰の対象である神祇を彫刻絵画に表現したものを神像という。日本では縄文時代の土偶や古墳時代の埴輪は神像とはみていない。勿論日本の場合とは異なるが、オリエントや地中海諸国では〈神像〉と稱する彫刻を紀元前から既にもっている。例えば、クレタ島には前2000年紀の前から、若い男神像を従えた女神像がみられる。

(Britanica, International Encyclopaedia 3, p. 15) それは他の東地中海諸国と同様に、若い男神を従えた一女神という形で表現されている。それは一組の男女神で、旺盛な生殖力の顕現とみられている(全上 p. 15)。このような原始的な女神信仰は或場合には、天上の神としてハトを伴い、あるときは冥界の神としてヘビを伴って表わされている。〈クノツノス〉から出土した女神像は両手に蛇をもっている。(『大系世界の美術』4巻15号写真)。そしてこの女神は前1500年か1600年のものといわれている(『大系世界の美術』4巻, p. 104)。

スペイン・グラナダ付近のガレーライベロ族の墓室から発見されたマドリッドの考古博物館所蔵の「大神座像」は背のない椅子にすわり、2匹の犬にかしずかれています。頂に穴があり、両乳の孔に通じ、そこから流れ出る液体が、女神のかかえている鉢の中に入るようになっている。これに類似する女神像は東地中海方面に見出されるので、これは豊饒の女神(アスタルテ)をかたどったものだろうという。この像は前7世紀のものだといわれている(柳宗玄「女神座像」(『大系世界の美術』4, p. 306))

これらの神像が、ギリシャで本格的な石造彫刻に発展するのは前7世紀の中ごろのデロス島で発見されたクニ

カンドラの奉納像(アテネ国立考古美術館)であるという。この頃からギリシャ人はオリエント、特にエジプトに大型像をつくることを学んだに違いない。それは巨大なオリエントの神像や王像に対するギリシャ人の驚きの反映であろうといわれる。このようにしてギリシャにおける彫刻の目的は、神殿の礼拝像と奉納像をつくるということからであったという。こうしてオリュンピア、デルフォイ、デロス、サモス、エンウシスなどの宗教的中心地や神託地や、ポリスの守護神の社殿内には神をかたどった礼拝像(本尊)が安置され、その神殿の周辺には敬虔な個人や家族又は国家が献じた、丸彫、浮彫りの奉納像が奉献された。しかも一般の民族が神を超人間的な、恐ろしい、抽象的なものとして捕えたのに対してギリシャ人は神を理想的で美しい人間の姿態として思い浮べたので、あの美しい礼拝像=神像ができたといわれる(松島道也「アルカイック時代」(『大系世界の美術』5, p. 114~115)このように西欧では神像は礼拝像として神殿に安置して宗教的信仰の対象にするために彫像されたわけである。

わが国における神像以前の聖体

日本では一般的に「神像」ということばは「神道」の神祇の美術的表現、とくに彫刻に対してのみ重点的に使われている。もともと日本の神祇の祭りは時に応じて人間の前に来臨し、やがて帰座するという形をとるのが本来の姿であった。西田長男博士は、

神社祭式の用語を藉りれば、かの降神と昇神とが神まつりの古来の常の形で、神が常宮に静り座すようになったのは仏像という外来の形式が入って来てからの後ではなかったろうか。神は常在したまうも

のではなく遠き海の彼方より、或は遙か山高きところより、その時々を訪れられ、かくして又去り行かれるのが、古往今来の最もありふれた姿であると考えられる。言い換えればそれは常世神である。(『日本宗教の発生序説』p. 23)

と述べている。

このような祭祀がやがて神霊の憑る神聖な物体を祀るようになり、この物体を日本では霊御形・霊代・霊体・御形・御正体・御体などと呼ばれている。この場合の〈聖なる物体〉は神祇祭祀のとき、神霊のよるべき標的にするのである。それであるから〈聖なる物体〉には種々の物体が用いられる。例えば、石、鏡、玉、剣、鉾、鈴、櫛、神衣、幣束、影像などがあげられる。これらのものが神霊の憑るものとしれるとこれを〈御正体〉又は〈神体〉と呼ばれるようになる。更にまた神体を納める器を〈霊筥〉といひ、これには〈御樋代〉〈御船代〉〈唐櫃〉などと呼ばれるものがある。(梅田義彦『宗教辞典』p. 193)

しかし岡田米夫氏は霊筥を璽筥(シルシ、ハコ)といひ、

伊勢神宮ではその璽筥を御樋代(ミヒシロ)といひ

この御樋代の奉安する容器を御船代と申す。

と述べている(安津・梅田『神道辞典』p. 414)。

そもそも〈神体〉という語の初見は「大倭神社注進状」「伊呂波字類抄」「和名正統記」巻10などであるから、平安中期ごろから使い始めたとみられている。元来〈神体〉そのものは、神自体の意味であるから、神祇の祭祀の時、神そのものとして礼拝の対象にしたわけである。

同種の語〈神体形〉という語が『西海道風土記逸文』にみえ〈霊御形〉という語が『皇大神宮儀式帖』にみえる。これらの意味は神霊の憑ります物体を指しているとい解される。これに対して平安末期には〈正体〉という語が『百錬抄』にみえる。これは神霊のよります真正正銘の物体という意味であろう。

このように我国の神祇祭祀には祭祀にあたり、神霊の憑りますものを立てたが、これらを『古事記』では〈神の「物実(モノザネ)」〉といひ、『日本書紀』では〈神の「物根(モノザネ)」〉と書き、『西海道風土記逸文』には〈神の「表(ミシルシ)」〉とも記しているし、『日本書紀』には〈三種神宝〉として八咫鏡・天むらくも剣・八坂に曲玉などもみえ、「出雲国造神賀詞」には大穴持命が己れの和魂を八咫鏡にとり託けて稱えたこともある。鏡・玉・剣が神体にされる習俗の古さがわかるのである(前掲岡田米夫氏「神体」による)

本地座迹説と神像の発生

このように我国の神祇祭祀には〈霊代〉を対象に古くから祭祀が行われていたのであるが、これらの原始的な〈霊代〉祭祀に代って我国にも〈神像〉が現われてくる。このような神像が発生してきた要因について西田長男博士は、

更にいうならば、かく神が神社の祭神としてその神殿に奉来せられるに至ったのは、恐らくかの金銅の仏菩薩像が寺院の本尊としてその金堂に安置せられるようになったのと相覆うところの現象であるまいかと考えられる。(中略)しかし仏教の伝来は仏像という永遠安置の新たなる形式をもたらし、此に寺院が建立せられると共に神社建築も亦はじめて起されるに至った。(前掲p. 23)

と述べている。

つまり、神祇は常在するものではなく、遠い海の彼方や遙かなる山高きところから、時々訪れて又去り行くものであるのに、神社という社殿を建立し常在してもらうということはいわば常世神になったことであるがそれは金銅の仏菩薩を寺院に安置するようになったからであるというのである。更にいうならば法隆寺の釈迦像は、民族宗教の立場からするとスサノオノミコト又はオオナムチノミコトの新たな顕現として金堂に安置されたもので、これらの神々が神社の祭神として永遠に祭祀されるようになったと変りはないと考えられている。

さて神像の発生については、『多度神宮寺伽藍縁起資財帳』の天平宝字7年(763)の条によると、

於道場満願禪師居住、敬造阿弥陀丈六、于時在人託神云、我多渡神也、吾經久劫作重罪業受神道報、今冀永為離神身欲歸衣三宝、如是託説雖敷數遍猶弥託云々、於茲満願禪師神座山南辺代掃、造立小堂及神御像、号多度大菩薩、(『続群書類従』27輯下)

とある。これが神像を初めて造立したという最初の記録である。しかしこの神像及びその他奈良時代の神像は現存していない。

このように既に奈良時代に神像を造り、「多度大菩薩」と号したとあるが、西田博士は、

そして尋いで神像の制作も。私は神像の権輿は八幡神のそれであったと思ひ。而もそれはすべての出家沙門の姿であった。所謂僧形八幡がそれに外ならない。八幡神の何たるかは諸説あつて歸一するところがない。しかしこの八幡神像の現に存する幾多の遺品より察するに、「辛国乃城始天、天降八流之幡天、吾者日本神止成礼利」(八幡宇佐宮御託宣集)

と託宣せられた。この神の信仰の原初形態の如何なるものであったかは略々想像せられる。即ちはじめより沙門形・僧形を以て現はれたまうた常世神であったのである。(前掲 p. 2 3)

このように、神像の発生も八幡神であると述べている。そして八幡神とは始めから僧形で現われた常世神だったとみているのである。つまり八幡神は祭祀の時だけに現われる神ではなく、常住まします神として発現されたのである。だから金銅仏と同様にその霊代も神像として現われてくるのは当然なのだといっているのである。

いうまでもなく八幡神の創祀は大分県(豊前国)宇佐に起った神であるが、早くから仏教と融合し、その祭祀氏族宇佐氏が虚空蔵寺、大神氏が法鏡寺を夫々建立した。(拙著『増神八幡代仰史の研究』下 p.93~945)。この二寺が天平に合体して八幡宮境内内に建立されたのが、八幡神宮寺弥勒寺なのである。

こゝで疑問になるのは弥生期から古墳時代に多くの新しい文化を移入し、八幡神の神託を担当した氏族である渡来氏族辛島氏は何故氏寺を建立できなかったのだろうか。これは一つの疑問である。

ところが、昭和49年大分県宇佐市黒村天福寺奥院の仏像群の中の4体が天平の塑像であることが賀川光夫氏の努力で久野健氏の調査によって判明した。この仏像の存在は既に江戸時代から諸書に書かれ既に知られていた仏像であるが、どうしてこゝに天平の塑像が入ったかは未だ判明してなかった。しかしこの仏像群のことについては『宇佐群記』坤之巻11によると小倉池の場所に専一山久全寺という大伽藍があり天正11年(1583)10月10日大友方の中山外記2百余の軍兵を率いて宇佐宮の焼跡を通り、小倉山の麓に押寄せ仏殿・法堂・廻廊・宝蔵一時に灰燼にしたとあり、次に割注で「此時観音は岩窟に移させ給い、権現は高家浦飛行まします」とある。私はこの岩窟が天福寺奥院であろうとみている。しかも瓦などからみるとこの久全寺は奈良時代の寺院である筈であるのに山号があるのは平安についたものであろうか。天平の塑像はこの寺のものともみてほゞ間違いはあるまい。そうなるとこの寺院は如何なる寺であらうか。

この寺の周辺は求菩提山と関係の深い頼巖の墓地と伝える妙楽寺、又彼の供養塔とみられる長寛の石幢のある、稲積山などがあり、求菩提山との関係、修験者の峯入に關係の深い地方である(重松敏美『求菩提山文化攻』)。求菩提山中興開山頼巖は辛島氏の出身である(『辛島系図』)。かゝることから結

論を許して頂くとすれば、この寺院こそ辛島氏の「寺」であり、四日市廃寺と称せられるものは実は郡家に關係する遺蹟であらうかと私は考えるのである。改めて別稿でとりあげるか一言触れておくことにする。

さて八幡宮に神宮寺ができたのが天平10年(738)それから43年後の天応元年(781)になると八幡神に大菩薩号が上られた(承和宇佐弥勒寺建立像起)。多度神には天平宝字7年大菩薩とか号せられたというが、神に大菩薩号が称せられるという事は既に人神信仰が発生したことになるが、その点では八幡神の応神天皇が初めてといつてよいので、確実な神の大菩薩号は八幡神が初めてといつてよいのではあるまいか。いずれにしても神を大菩薩と呼ぶということは、日本の宗教界に新しい神祇ならざる〈神〉(仏神)を発生させたことになる。

このようになると、八幡大菩薩(神)は盛に寺院鎮守に勧請されることになり、八幡信仰は巫覡神道から道仏両教の影響の強い理論神道の先駆をなすことになった。かくて地域の守護神から国家の守護神へと発展する。これが貞観元年(859)石清水八幡宮となるわけであるが、その前既に天平に東大寺八幡として進出しているのである。石清水に勧請されてから間もなく貞観8年(865)天台の僧惠亮はその上表文に、権現思想を書き記している。更に又承平7年(927)の太宰府牒には「権現菩薩垂迹猶同」として本地垂迹の思想がはっきりと現れてきた。尤も神仏同体説は、奈良時代に既に現れているという説も立てられている。西田長男博士は「伊勢神宮と行基の神仏同体説」(『神社の歴史的研究』壇書房昭和41年)によると「神仏同体説乃至は本地垂迹説か行基からはじまるとの古来の説は必ずしも疑わらるべきものではなく、寧ろ信憑してもよいのではないかと思うものである」と述べている。このような点では既に各社に神宮寺が発生していることからみても、うなずかれることであらう。

これは別にして日本の彫刻史をみると少くとも奈良時代中期までは仏菩薩だけが彫刻の対象になっていたが、その末期になると羅漢像や鑑真など、仏弟子としての人間像が現われている(法隆寺五重塔、唐招提寺等)。このような風潮の中に平安時代に入ったので、この時代に本地垂迹説が本格的になるのは当然であらう。かくて仏像を彫刻することは神祇を彫刻することと別のものではなくなるのは当然といわねばならない。このようにみると多度神宮寺に神像を造ったという同寺資財帳の記事も改めて検討する必要があるかと考える。

現存する神像

神像造立の最古の史料は既に述べたように天平宝字7

年（763）の多度神宮の資財帖であるが、神像彫刻の現存のものは平安初期（9世紀）のものが最も古く、京都市松尾大社の男女神像、奈良市薬師寺鎮守八幡宮の八幡三神像、京都の教王護国寺（東寺）御影堂の八幡三神像が、我国神像彫刻の発生的形態を示す像だといわれている。

松尾大社の男神像は冠を載き袍を着け、拱手して笏を執り、結跏趺坐の姿である。松尾大社は秦氏一族の祖神を祀る社である。実在人としての理想像として造られたにちがいない。男神の二像の一（像高何れも1mに近い）は眉根を寄せ威厳を示し、神性を表している。女神像像（87.6cm）は頭頂に髻をつくり、髪を垂らし袍衣をまとい犯しがたい気品をそなえている。初期神像の一典型であるといわれている。

薬師寺は寛平年中（889～897）に石清水八幡宮から勧請され、その時八幡三神像も造像されたもので、9世紀最末期頃の作品とみられている。中尊はいわゆる（八幡神で像高38.8cmで彩色され、法衣に袈裟をかけ、比丘形をし仏像の影響が強い。女神像は神功皇后像は高さ33.9cm左膝をたてている。仲津姫像は像高36.8cmで右膝をわずかに起している何れも両手は袍の下にかくれている。この三軀は何れも小さいが、製作年代が明らかである点で非常に貴重に扱われている。

教王護国寺（東寺）の等身の三神像の中尊は僧形八幡神で像高109.0cm、左手には、杖をもち、耳朶を長くして三道を刻んでいる。女神(一)は像高113.5cmで、左手に小木をもつ、女神(二)は像高111.7cmで左手には蓮をもつ、三像とも右手は印相を結び、三例のどれより仏像的である。（以上鷲塚泰光「神像と肖像」（毎日新聞社『重要文化財』5参照）

八幡三神像の信仰はこの二例を先駆として、平安後期に至ると益々盛となる。重文に指定されているものとしては、奈多宮（大分県）の八幡三神像の3軀がある。中尊は僧形八幡神で像高54.2cmであるが、前の二例と違い法衣の鬘波式のヒダもなく胸から腹の上部まで露出していて、左右の手も破損して失われている。女神(一)は像高55.8cmで宝冠をつけ、女神(二)は像高48.5cmで髪は前に垂らしている。双方とも袍の下で両手は組まれている。前の二例に比べると底辺が狭くなり技法が可なり単純化している。

鎌倉時代に入ると滋賀県の日牟礼八幡神社の八幡三神像があるが、中尊菅田別尊として冠を着けあごにはくひげを蓄えている。島根県赤穴八幡宮の八幡三神像は嘉暦元年（1326）慶覚作とあり同じく冠をつけ笏を持っている。奈良東大寺の僧形八幡神像は一軀のみで建仁元年（1201）快慶の作で右手に抜をもつて。熊本県の藤崎

八幡宮は僧形八幡神、女神像の2軀があり、応永25年（1418）の作であり、像高も何れも80cm許りあり堂々としている。

このように平安時代後期（藤原時代）になると、一般的には華麗な王朝美術の影響により、華やかな色彩をもつようになり、雑多な神像が現れてくる。数が多くなる反面形式化省略化が著しく個性が失われる傾向がみえる。雑多な神像としては天部像形式の神像や、和歌山県の熊野大社諸像のような発生的形態を示す像があったり滋賀園城寺の新羅明神像のような個性的な神像から、隨身像や狛犬陰陽道の神々の神像も造られた。

鎌倉時代になると、当代特有の写実的肖像の神像が多くなり、八幡神像では東大寺僧形八幡神像と吉野水分神社五依姫命像が代表されるが、後期になると古い形式をつぐだけでやがて仏像と同様衰退してしまうのである。

ガンダーラ美術との関係

我が国における神像とは縄文の土偶や、古墳時代の埴輪を神像とは言わず、9世紀以後現存している神祇の彫刻のみを神像といっている。しかも日本の神像は仏像によって発生したというのである。そこで仏像の発生を考えてみる必要がある。

いうまでもなく仏像の発生はインドの西北国境地方、今日のパキスタンのインダス河とカーブル Kabul 河の合流点を中心とする地方を、1・2世紀から4・5世紀にかけてガンダーラ Gandhara の地方といふ、現在は Pakistan のペシャワール Peshawar 地方である。その地域はインダス河東方のタキシラ Taxila から現インドのカシミール地方の一部から、アフガニスタン東辺に亘る広大な範囲であった。こゝにギリシャ・ローマ風の仏教美術が起ってきた。この地方は両河に挟まれているので割合水に恵まれ、池などもあちこちにある。ことにタキシラなどは周囲に山をひかえ奈良盆地を思わせる所である。

前2世紀の頃より約200年間ギリシャ系王国がこの地方に君臨し、メナンドロス王は仏教に改宗したといわれる。始め仏教美術は貨幣に彫られ、仏教美術の最古の遺品としては紀元前後の50年間にあたる後期サカ時代にみられるが、まだ仏像は現れていなかった。これがギリシャローマ風の美術の影響をうけて釈尊の像（仏像）として人形の形姿で表わされたのは1世紀後半のクシャン朝時代であり、この時代はローマとその交通が盛であった。

最初ガンダーラでは釈尊の像はギリシャ人のような面貌で作られ、ギリシャ・ローマ風の服装・装身具をつけた菩薩やその他の像も造られた。仏像は仏塔 stupa の基壇、あるいは覆鉢（ふくばち）部の胴部の表面に仏伝浮

我が国における神像の源流とその周辺

彫として現われ、それが次第に〈壁がん〉に安置されるようになり、礼拝像として単独像に発展し、その精神、肉体の非凡性を表現するために「三十二相八十種好」などの約束まで整えられ、3～4世紀の頃ブロンズ像もわずかにみえる。石彫は青みを帯びたガンダーラ石が使われた。4～5世紀にかけて塑造彫刻が盛んになり、アフガニスタンのハッダを中心に美しい多くの作品が生まれた。これを後期ガンダーラ美術と呼んでいる。ハッダの周辺には多くの未発掘の遺跡が多い。

しかしミヒラクラ王が廃仏を断行したので6世紀にはガンダーラ美術は廃絶したが、インド本土に刺激を与えマトーラはガンダーラ美術の影響をうけ独特のインド的仏像を造ったし、またシルクロードを東行し東方に及び中国の仏教彫刻に影響し4世紀末には中国にガンダーラ風金銅仏を造り、中国にも隆盛を夾しやがて朝鮮半島から6世紀に日本に入ってきた。こうして日本の仏像、更に9世紀の神像に発展したわけである。(未完)。

ハッダの塑像



基壇の下の仏像



壁がんの仏像